

『差別の記憶を未来に生かす』

朗読者 角岡 伸彦

9

自分はいったい何者なのか？

あなたはそんなこと考えたことありますか。

誰もそんなことあらためて考えないし、考える方がへんかもしれません。僕だって考えてなかった。それが、ウーンと首を傾げるようになったのは、自分がいわゆる被差別部落の出身だと自覚した時からです。

10

小学校六年生の時でした。担任の先生が授業で、江戸時代の身分制度を説明した後に、僕が住んでる地名を挙げて「この近くにも部落があるんだよ」と言ったのです。僕は「ええっ、かわいそう」と大声を上げました。それくらい、無自覚で無邪気でした。

15

そこに住んでいるからといって特別な差別を受けたわけでもなく、いじめられるわけでも、コンプレックスを持つこともなく育ってきたからでしょう。ともかく同和問題は僕にとって、よくわからない、何だか不可解なものでした。

20

こんな話を聞きました。

僕と同じ地区出身の同級生が、部落出身ということ、付き合っていた彼女の親から結婚を反対され、無理心中していたというのです。

同級生の彼とは、中学卒業後は出会うことはなかったのですが、何の手助けもできなかったことに悔しさを感じています。子ども時代にはわからなかった部落差別が、大人になってわかるようになってきました。

部落差別をなくすために、当事者や行政、教育関係者がさまざまな取り組みを進めてきました。その結果、差別は以前に比べて、ずいぶん減ってきたなと感じています。でも、被差別部落がなくなったかという点、そうではありません。同和対策事業によって建設された施設や住宅をなくしたところで、そう簡単に歴史は塗り替えられないし、人の記憶を消しゴムで消すこともできません。

この国に、かつてあった差別。そして、今もある差別。その歴史と現実を学び、険しい道を先人たちがどう乗り越えてきたのか、高い壁をどうやって切り崩してきたのか。それをしっかりと次の世代に語り継いでいくことは、大事なことで僕は思います。

同じ過ちを繰り返さないために、過去に学び、未来の子どもたちに、バトンをしっかりと渡していくことが大切だと思います。

それは「負の遺産」なんかじゃない。未来に向けた、僕たちからのメッセージです。